

二代国輝の風景画における貞秀からの影響についての考察

沖 田 友 紀

はじめに

筑波大学付属図書館には寿徳寺住職であった宮本宥弑氏により寄贈された錦絵が所蔵されている。その中の一作品群「衣喰住之内家職幼繪解之圖」を描いたのは、幕末・明治期の歌川派の絵師、二代国輝である。「衣喰住之内家職幼繪解之圖」は、大工、左官、畳屋など、主に家作りに携わる職人達を描いたものである。職人達の作業の様子が作業図と作業工程を説明する詞書によって教科書的に表されたこの錦絵は、明治六年、幼児の家庭教育のために文部省から発行されたものである。

二代国輝の晩年近くに制作されたこれらの作品は彼の作品群の中では珍しいものに分類される。二代国輝が絵師としての能力を最も発揮したのは明治の文物を描いた開化絵を中心とした風景画だからである。風景画に定評があったと考えられる二代国輝が「衣喰住之内家職幼繪解之圖」の制作を行うに至った経緯については国貞一門と明治政府の関係などが推測されるがこの点についてはここでは詳しく触れず、風景画に重点を置いて論じる事にする。

開化風景画の分野で名を残している国輝であるが、その風景画に関しては師で

ある歌川国貞(三代豊国)からの影響はあまり見られないようである。そして、これまで二代国輝の風景画については詳しい研究はほとんどなされてきていない。二代国輝の得意とした風景画の源流はどこにあったのか。この問題を取り上げる際、これまで指摘されてきたのは歌川貞秀との関連である。二代国輝は一時、兄弟子貞秀と起伏を共にし、深く影響を受けたという¹⁾。しかし、その点について深く論じることはこれまでなされてこなかった。本論文は二代国輝の風景画が同じ歌川国貞門下の歌川貞秀の影響を受けている可能性について具体的な作品比較を行いながら言及を試みることを目的とする。

第一章 二代歌川国輝について

従来の二代歌川国輝研究から

二代国輝は天保元年(一八三〇)生まれ、明治七年(一八七四)に四五歳で没する。作画期は文久から没年にまで及んでいる。姓を山田、名を金次郎という。歌川国貞(三代豊国)の門人で初め二代国綱を名乗り、慶応元年二代国輝と改める。号は一雄斎、一曜斎、曜斎などがある。天保元年より役者絵などと描き、二代国貞、芳幾、二代広重、芳年、貞秀、芳盛等と合作の「末広五十三次」(慶応元)なども

参加した。明治に入ると東京名所絵、横浜絵のほか殖産興業物、北海道、甲府などの地方の洋風建築物を開化風景として描いている。先にあげた文部省発行の教育画や技術画も手がけている。二代国輝の属する国員門の絵師の中で明治期まで生き残ったのは貞秀、国周、国輝、国明、国利、国政、二代国貞などである。この中でも二代国輝は、明治開化絵では代表的な絵師の一人で作品数も多く、資料的価値が高いとされる^三。当時の各界細見番付でも、上位に名を残している(貞秀の項参照)。それにも関わらず、現段階での調査に基づくならば、今日まで彼について十分な研究はなされていないといえる。^四

二代国輝の主な作品群

ここで、二代国輝の主な作品を抜粋して年代順に示すことにする。

【幕末期】

※国綱署名のもの

「孝子彌五郎伝 郡山駅」(文久元)

「源頼朝公上京之圖」(文久三)

※国輝と改めてからのもの

「家久連里(かくれさと)」(慶応二)

「富士山諸人参詣之圖」(慶応三)

「東京築地保豆留館海岸庭前之圖」(慶応四)

「奥州海岸一覽(榎本武揚等の脱出)」(慶応四)

【明治期】

「東京江戸品川高輪風景」(明治天皇御東幸之圖)(明治元)

「東京府御酒頂戴」(明治元)

「東京築地ホテル館」(明治二)

「東京名所一覽独案内」(明治二)

「横濱吉田橋通繁昌之圖 並本町通弁天通外國館遠景」(明治三)

「見立評判諸商人馬車乗合」(明治三)

「大嘗祭豊明節會奉賀祝賑」(明治四)

「築地海岸英字寮之圖」(明治四)

「東京名所 海運橋五階造真圖(三井爲換座)」(明治五)

「古今珍物集覽 元昌平坂聖堂ニ於テ」(明治五)

「東京第一名所 日本橋御模様替繁栄之(電信局)」(明治六)

「上州富岡製場」(明治六)

「東京各大区之内 品川沖蒸気船鉄道遠望」(明治六)

「海運橋第一国立銀行」(明治六)

「衣喰住之内家職幼繪解之圖」(明治六)

「東京高輪鉄道蒸気車全栄圖」(明治七)

「山梨県甲府勸業場之圖(製絲場)」(明治七)

「東京名勝之圖 浅草寺電信局」(明治七)

二代国輝は幕末から、築地ホテル館や一覽図など、明治期の開化風景画につながる作品を残していることがわかる。ここで注目すべき作品は、二代国輝が慶応四年に描いている「東京築地保豆留館海岸庭前之圖」(図一)である。この作品は東京で最初期の洋風建築物の一つである築地ホテル館を描いたものである。同年八月から十一月の間に竣工したとされるこの建物を二代国輝はいちはやく描いている。しかし、築地ホテル館は明治元年完成してから明治四年に取り壊されるまでに多くの絵師が作品を残しており、この時点で二代国輝がこのような画題の先駆的存在である^五。また、築地ホテル館自体、明治改元がなされた前後に完成しているということもあり、その当時描かれた作品も同じ制作年で

あっても慶応四年と明治元年の記載の違いがあり曖昧である。二代国輝の「東京築地保弓留館海岸庭前之圖」については次の項で補いたい。

現段階の調査によると、二代国輝の作品群では明治期の洋風建築物を描いたが最も多く、次いで橋や横浜の港、蒸気機関車、蒸気船などがあげられる。撃剣会・曲馬・相撲絵なども描いているが、前者のような明治の風物詩を風景画の一部として描いたものがやはり国輝の作品としては印象深い。また最も多い洋風建築物についても、民営の様々な建築物に混じって、「東京大一大學區開成學校開業式之圖」(明治六) など官公營の建築物も描いている。これは建築物のほかに明治天皇がその式典に御臨幸した様子も描かれている。国輝の風景画については次の項で詳しく論じることにする。

第二章 国輝と風景画

開化絵師としての国輝

そもそも開化絵とは明治期の洋風建築物、蒸気機関車、蒸気船、人力車、殖産興業図などを、いわゆる文明開課の文物を画題にした一連の作品をいう。一般に初期は、新文物を伝統的な技法で描くが、やがて西洋画の本格的移入が試みられるようになる。鉱物性の赤い顔料を多用した作品が多く、赤絵とも呼ばれている。開化絵は一般に歴史資料的価値は認められているが芸術的価値は低く位置付けられている。^{*}

二代国輝は特に明治期に入ってから晩年の明治七年まで多くの開化絵を描いている。作品数の多さだけでなく、生き生きとした画面構成からも二代国輝が文明開化の様々な事物に好奇心の目を注ぎ、意欲的に制作に取り組んでいた様子がうかがえる。これら国輝の開化絵の中で重要な意味を持つと考えられるのが前項であった「東京築地保弓留館海岸庭前之圖」である。二代国輝は同慶応四年、「東都築地ホテル館之圖」と

いうホテル館落成時に出版された案内図も手がけている。これは、築地ホテルの外観図をめくると下から内部平面図が表れる簡単な仕掛け絵のような形をとり、その図面は築地ホテル館の実際の設計図と一致している。いずれにしてもこの「築地ホテル館」がそれ以後の国輝他の絵師達にとって洋風建築物への取り組みのきっかけとなっているといえよう。また、二代国輝は東京のみならず、横浜港周辺の様子を描いた横浜絵も数多く残している。しかし横浜絵の中でも国輝の関心は外国人よりも風景全体に向いていたようである。また、「箱館豊川町武蔵野三階造全盛之圖」など、地方の洋風建築物も描いている。しかし、国輝が現地を訪れて描いていたかどうかは定かではない。

国輝風景画の特徴

国輝の風景画の特徴として挙げられることは第一に、非常に正確な遠近法に基づいた画面構成である。「第一區從京橋新橋迄 煉瓦石造商家貴賤賢況盛景」(明治七)などに顕著に見られるように、画面に奥行を待たせる為に建築物を有効に用いている。第二に精密な写実描写があげられる。例えば、「東京築地保弓留館繁栄之圖」(明治二)(図二)は、明治元年に撮影された築地ホテル館(図三)とほとんど同じ角度から描かれている。「東京名所 海運橋五階造真圖」(明治六)(図四)に見られる三井組ハウス(第一国立銀行)は、その前年に撮影された実物の写真(図五)と比較してみてもその卓越した描写力が伺える。「東京駿河町三井組三階家西洋形之圖」(明治六)(図六)(図七)も同様である。この二点はいずれも建物の落成記念時に関係者に配られたものである。そのような目的に沿う形で写真に匹敵する写実描写を持つて描かれている。全体像が捉えやすい角度で描かれているのも国輝に注文主に対する意識があったからだろう。そのために写真を参考にして制作を行った可能性もある。このように二代国輝は建築物を含めた風景の写実描写に強いこだわりを持っていたといえるのではないだろうか。第三に鳥瞰的図法

があげられる。国輝は多くの鳥瞰的図法を用いた作品を残している。「上州富岡製絲場」「守田勘弥元鳥転座之圖」「明治天皇御東幸之圖」「東京築地ホテル館」が顕著な例である。これらの作品では作者の視点はかなり高い位置におかれ、人物は小さく描かれている。視点を高く設定する事でかなり遠くまで見渡すことが可能になり、画面上に大変な奥行を与え、ダイナミックな画面を構成することに成功している。

風景面を描いた浮世絵師は数多くいるが、代表的なものとしてはやはり葛飾北斎と初代歌川広重が取り上げられる。しかし、二代国輝は開化絵師としては、諸所で触れられるものの、その風景面という点にはそれほど着目されてこなかったようである。

同時代の開化絵師との比較

二代国輝と同時代の開化絵師は三代広重ら多数存在する。風景面においては、どの絵師も名所絵を中心に同じような画題をとりあげている。西洋的遠近法を用いている絵師は多いが、二代国輝の作品は中でも主題となるものを自然な形で風景のなかに配置している印象を受ける。また、先にあげたように建築物などの全体像が分かりやすいように描いているのも、今日、資料的価値が高いとされる理由の一つだろう。一方で三代広重が同じ築地ホテル館や、第一国立銀行を描いている作品を見ると、建物の一部分をクローズアップして近景に持っているものや、近景に人物を配し背景に建物を持つてくるものがある〔図八、九〕のに対して二代国輝にはこのような作品は少ない。また、二代国輝が高い位置に視点を定めることが多いのに対して、三代広重は視点を低い位置に据えた作品が多い。

第二章 二代国輝と貞秀

貞秀について

貞秀は文化四年（一八〇七）生まれ、没年は不明だが、明治八年とされる作品があることと、貞秀と懇意の間柄であった歌川国松（一八五六―一九四四）の回想などから明治十一年（一八七八）頃まで生存したと推測されている⁹⁾。作画期は文政九年（一八二六）から明治八年（一八七五）頃とされる。姓は初め歌川、まもなく橋本を使用する。名は兼次郎、号は貞秀、玉蘭齋、五雲亭、玉翁などがある。二代国輝と同じく歌川国貞（三代豊国）の門人である。

貞秀は国貞の第一の門人といわれる。天保以降多くの作品を残し、美人画、武者絵、風景画、団扇絵など多様な画題がある。横浜絵においては、総数約八三二点のうち一〇六点が貞秀の作とされている¹⁰⁾。貞秀は中でも幕末期、横浜絵を含む鳥瞰式精密描写の一覧図を最も得意とし、その分野で名を残している。慶応二年パリ万博に浮世絵師たちが出品を命じられた際には芳宗とともにその総代を勤めたことから、当時の浮世絵師の中では代表格であったと考えられている。実際、明治元年十一月発行の各界細見番付『東京歳時記』では、上位から貞秀、芳虎、芳幾、芳年、国周、二代国輝、二代国貞、国明、芳春、芳盛（以下略）の順であったという。貞秀の師弟関係については「木曾山中合戦」（万延元）を描いた秀輝があげられる¹¹⁾。幕末の浮世絵界で高い地位にあつて明治まで生き延びた絵師の中では第一人者にあたる。しかし、没年が明らかでないように、幕末浮世絵界の第一人者は、明治に入ってその激動の時代の中に忘れられることとなったのである。

貞秀の一覧図と風景画

貞秀は嘉永六年刊の『江戸寿那古細選記』の浮世絵師の項では、第6番目に位

置し、「貞秀 つふらん(通覧)」と記されていることから、一覽図の名手として評価されていたことが分かつている¹⁴⁾。主な作品としては「東海道名所之内横浜風景(万延元年)」「肥前長崎丸山廊中之風景 肥前崎陽玉浦風景之圖」(文久二年)〔圖十一〕「奥羽一覽之」(慶応四)などがある。これらの風景画は貞秀のほとんど日本国中に及ぶ旅行から制作されており、六枚綴り、九枚綴りの大作を描いている。その特徴としては精密に作られた模型を上から覗き込んだような構図、一覽図と風景画の要素を同時に取り込んだような画面構成があげられる。彼の細密描写は手間がかかるため版元を悩ませるほどであったという。実際彼の作品を見てみると、遠くの建物の瓦屋根まで細かく描かれていることが分かる。これらの精密な風景画鳥瞰図は貞秀の妥協しない性格をよく表したものと見える¹⁵⁾。同時期に二代歌川広重なども一覽図を描いているが、貞秀のものほど精密でなく、大きさもせいぜい三枚綴りほどである。また、中には貞秀の作品と構図など一見似通っている作品がないわけではないが、二代広重らの作品が所々雲や霞のようなもので視界が遮られているのに対し、貞秀のものが余すところなく写実的な細密描写に貫かれていることもその特徴といえるかもしれない。

二代国輝風景画における貞秀からの影響

ここで本稿の目的である二代国輝の風景画における貞秀からの影響について考察してみたい。両者を共通して特長付けるものとして、風景画における鳥瞰的図法があげられる。その顕著な例として、幾つかの作品比較を試みたい。まず、貞秀の「肥前長崎丸山廊中之風景 肥前崎陽玉浦風景之圖」(文久二)〔圖十一〕と二代国輝の「上州富岡製絲工場」(明治六)〔圖十二〕の二点をみてみることにする。貞秀の「肥前長崎丸山廊中之風景・肥前崎陽玉浦風景之圖」はそれぞれ三枚続きの二種で、あわせると六枚続きになる。左側の「肥前崎陽玉浦風景之圖」は長崎の港を描いており、一覽図的な要素が強く出ている。オランダの国旗が立てられた

出島が左側に見える。画面奥のほうには連なる山々が描かれ、入り組んだ海岸線によって奥行感が出されている。右側の「肥前長崎丸山廊中之風景」は丸山遊郭を描いたもので、細かな筆遣いにより多くに人で賑わう様子が描かれている。洋服を着た西洋人らしき人物も見える。遊郭の建築物は窓枠や屋根に至るまでかなり緻密な観察に基づいて高い視点から描写されている。貞秀は自らの著作、「海陸道中画譜」の中で文久年間に長崎を訪れたことに触れているので、この作品も実際に見た物を描いたと考えられる。¹⁶⁾ 一方で二代国輝の「上州富岡製絲工場」は、明治政府の殖産興業政策によって作られた製糸工場を描いたものである。こちらの作品も建築物が中心的な主題となっており、工場周辺の人物は非常に小さく描かれている。貞秀のほうが若干高い視点から描いているが、二代国輝のこの建築物の鳥瞰的描写法は貞秀のものと非常に似通っている。二代国輝が実際に上州を訪れていたかどうかは定かではないが、貞秀の画風との明確な類似が見られる。

もう三作品、貞秀の「建久元年源頼朝卿上京行粧之圖」(文久二)〔圖十二〕と二代国輝の「東京江戸品川高輪風景(明治天皇御東幸之圖)」(明治元)〔圖十三〕「東京呉服橋南通遠景之圖」(明治元)〔圖十四〕を比較してみることにする。この三作品の共通点は將軍や、天皇などの行列をやはり鳥瞰的な構図でダイナミックに描いている点である。この三作品は、いわば行事的なものを主題としてけると同時に風景画であるともいえる。「東京江戸品川高輪風景(明治天皇御東幸之圖)」は明治天皇の行列を主題としているが、画面上部にある題名の通り、品川の風景の中に天皇の行列を描いていることが分かる。三作品ともはるか彼方まで見渡すように描かれている。そのような図法を取ることににより、行列という行為自体の規模の大きさ、大勢の人々を見るものにより強く意識させる。まさに壯観といった風景である。特に、「建久元年源頼朝卿上京行粧之圖」と「東京呉服橋南通遠景之圖」の二点は行列がちやうど橋を渡っている場面が描かれている。二代国輝の作品のほうがやや人物が大きく描かれ、後景の描写の精密さに欠けるが、上空を舞

う鳥の描写など、類似する点が多い。一方は過去の將軍の歴史的出来事、他方は明治の天皇という同時代の主題を用いているけれども、このように風景画的要素の強い画面の中に別の主題を盛り込むのも貞秀、国輝両者に共通した特長なのではないだろうか。もちろん、かつての北斎や広重のような叙情的でどこか平和な風景画では人々に印象が薄く、風景画にも事件性のあるものが望まれていた時代であったことは否定できない。

次に二代国輝の「第一大區從京橋新橋迄 棟瓦石造商家蕃昌貴賤贅澤盛景」(明治七〔圖十五〕と貞秀の「神奈川横濱新開港圖」(万延二〔圖十六〕の二点を比較してみる。国輝の作品は明治期の石造り洋風建築物が建ち並ぶ東京の風景である。はつきりとした一点透視法が用いられ、画面に深い奥行感を与えている。一方貞秀の作品は横浜の商家を描いているが構図は国輝のものと同様である。ただし、描かれている建築物は洋風ではなく伝統的な商家の造りである。この二点は共に三枚続きであり、遠近法を利用し、やや高い視点から描いている。貞秀は開港したばかりの横浜の様子を描いている。この作品が描かれた万延元年(一八六〇)は横浜開港から二年足らずの時期で通りを行き交う人々の姿も和服がほとんどなのである。一方、二代国輝は西洋化しつつある東京の町並みを描いている。洋服の人物が多く見られ、馬車や人力車が行き交う。この二点は幕末期の文明開化の入り口に立っている日本と、開化の道を歩む日本を、後者が前者の主題を置き換えて、同じ構図の中に表現しているといえる。

最後に、一覽図という観点から二人の比較を試みることにする。貞秀は先に述べたように一覽図の名手として知られ、多くの一覽図を残している。一方で二代国輝も貞秀の一覽図制作時期と重なる慶応四年前後を中心として数点の一覽図を描いている。次にそれらの具体的な作品をあげる。

慶応元年

貞秀「大阪名所一覽」

貞秀「西国内海名所一覽」

慶応二年

国輝「東海道神名川横濱風景」

慶応三年

貞秀「改正横濱細見圖」

慶応四年(明治元年)

国輝「奥州海岸一覽之圖」

国輝「從上総下総海辺富士遠望」

貞秀「奥羽一覽之圖」

貞秀「大港横濱之圖」

国輝「東京名所一覽独案内」

明治二年

この頃はすでに貞秀の作画の最盛期を過ぎていたといえる。とはいえ、貞秀はここにあげた以外に、この前後にも多くの作品を残している。ここではあえて二代国輝の作品と時期の重なるものの中から抜粋した。この通り二代国輝の残した一覽図は決して多くはない。しかし国輝が一覽図を描いているのはこの時期に限られる。また、明確な主題や様式の類似性は見出せないものの、二代国輝の「東京名所一覽独案内」などは貞秀の横濱一覽図の精密さに通じるものがある。この頃に二人に何らかの接点があったとは考えられないだろうか。同時期の慶応元年、共同作品「末広五十三次」¹⁵の制作に二人とも携わっていることを思えば、十分に考えられる。また、版元という点に焦点を当てて見ると両者とも大黒屋の印のものが比較的多数あり、共通点といえる。しかし右にあげた一覽図に版元の共通点が見られるわけではなく、この時点での判断材料にはなりにくい。

一方、人物画に関して言えば二人の間には類似性はあまり見られない。特に貞秀は横濱絵のモチーフの一部として西洋人の姿を描いた作品を多く残しているが、国輝は西洋人を描いた作品はほとんど残していない。二代国輝の人物画としては相撲絵、文部省製本所から発行された「衣喰住之内家職幼繪解之圖」における一連の職人図など日本的な要素のものが多く、しかしそこに二代国輝の特徴を見

出すのは難しいと思われる。

また、貞秀が日本中を旅して一覧図その他の作品を制作していたといわれているのに対して、二代国輝が風景画を制作する際に実地調査を行っていたのかどうかは定かでない。

おわりに

二代国輝がその風景画において貞秀から影響を受けたということは今まであげてきたように様々な方面からその可能性が窺える。現段階でそのように断定は出来ないものの、鳥瞰的視点と精密描写から描き出された風景画は、幕末から明治という流れの中で明らかに一貫した世界観を形成している。貞秀も国輝も鋭い観察力を持って対象に向かうことに関心を持っていたのである。時代が移り、画題が変化しても変わらないものがそこにはある。二代国輝は幕末の偉人によって作られた精密な鳥瞰的風景画を明治開化期の新しい文物をより効果的に、印象深く描く為に用いる事に成功している。開化の文物という新しい主題を得た明治の浮世絵は、そこに独自の世界を展開していくのである。

一方で貞秀と二代国輝の比較から浮かび上がったことは、二代国輝の画業が今日一般に考えられている以上に当時の浮世絵界において重要な意味を果たしていたのではないかということである。従来の国輝観ではほとんど触れられることのない姿をわずかながら垣間見ることが出来たと思う。本論文では、明治当時の国輝の評価がどのようなものであったか、その核心に迫るには及ばなかった。しかし、第二章で述べたように、財閥を注文主に抱えるなどかなり高い地位に置かれていたことが伺えた。実際、幕末から明治二十年頃までの錦絵による資料供給者の本筋としての流れを貞秀から、二代国輝、そして三代広重に位置付ける見方もある¹⁾。幕末から明治にかけて生きた浮世絵師の第一人者である貞秀。彼の

後継者とすれば、二代国輝が明治初期高い地位と評価を受けていたという可能性も強くなる。以上のようなことを踏まえて、二代国輝を貞秀の後継者とみなすのは極めて自然なことではないだろうか。

《参考文献》

- 『日本の近代美術と幕末』匠秀夫 沖積舎 一九九四
『浮世絵事典』全三巻 吉田映二 画文堂出版 一九六五
『明治の浮世絵版画』北海道立帯広美術館 一九九八
『横浜浮世絵と日本』神奈川県立歴史博物館 一九九八
『幕末明治開化期の錦絵版画』樋口弘 味燈書屋 一九四三
『相撲錦絵蒐集譚』ジョージ石黒 平文社 一九九四
『日本版画美術全集 七 現代版画Ⅰ』小野忠重 講談社 一九六二
『浮世絵の子供たち』くもん子供研究所 二〇〇〇
『幕末明治の浮世絵』奈良教育大学付属図書館 一九九八
『カラー版浮世絵の歴史』美術出版社 一九九八
『集大成横浜浮世絵』神奈川県立博物館 有隣堂 一九七九
『秘蔵浮世絵大観』榑崎宗重編 講談社 一九八八
『原色浮世絵大百科事典』原色浮世絵大百科事典編集委員会 大修館書店 一九八二
『幕末明治の浮世絵集成』樋口弘 編著 内外経済社 一九五五
『風俗画報 第百号』東洋堂 一九九五
『明治文化 新旧時代 第一年第一冊』明治文化研究会 一九二五
『明治文化 新旧時代 第一年第十冊』明治文化研究会 一九二五
『明治文化 新旧時代 第一年第十一冊・第十二冊』明治文化研究会 一九二六
『明治文化 新旧時代 第二年第九冊』明治文化研究会 一九二六

『明治初期の洋風建築』堀越三郎著 小瀧文化 一九二五

『日本美術館』小学館 一九九七

「衣喰住之内家職幼繪解之圖」を含む文部省発行の錦絵は現在の収蔵先である本学付属図書館宮木文庫リストによる本書の書名は「文部省発行錦繪・衣喰住之内家職幼繪解之圖等」であり、他の名称としては以下のものが確認されている。「文部省掛図総覧²」では「幼童家庭教育用絵畫」、「文部省第一年報」の「編集事務」では「容童翫喜品画」、「筑波大学付属図書館特別展目録・明治のいぶき」では「文部省発行教育錦絵」とされている。本学所蔵のものは昭和十一年、宮木氏より本学の前身、東京文理科大学に寄贈されたものである。（岡野素子氏の資料に基づく）

二 『日本の近代美術と幕末』 p 一五二

三 『幕末明治の浮世絵集成』本文 p 六八

四 このように国輝に関する資料が乏しいなかで、樋口弘氏の『幕末明治開化期の錦絵版画』『幕末明治の浮世絵集成』は双方で七百余点にもなる図版からなる重要な資料である。氏の著作の図版目次からは明治期の浮世絵の流れが一望できる。

五 一代国貞、二代広重などが明治元年の記載のあるものを描いている。国輝のものは慶応四年の記載だが、その時間の開きのあるものではないように思われる。二代国貞の作品は国輝の作品とは反対側から見た構図になっている。「梅堂国政補助」とあり、二代国貞と三代国貞の合作と考えられる。建物自体は精密な描写であるが、実在しない雲が描かれるなど古典的な技法の踏襲も見られる。二代国貞は国輝より七歳若く、明治十三年に没する。三代国貞は大正期まで生存する。

六 『原色浮世絵大百科事典 9 作品④広重―清規』 p 七十

七 『明治初期の洋風建築』 p 一六

八 『明治初期の洋風建築』 p 三八

九 『日本の近代美術と幕末』 p 一五〇～一五一

十 『集大成横浜浮世絵』 p 四四三

十一 『日本の近代美術と幕末』 p 一五〇～一五二

十二 『原色浮世絵大百科事典』九巻 p 六六

十三 『日本の近代美術と幕末』 p 一三六

十四 『横浜浮世絵と日本』 p 三二

十五 二代国貞、芳幾、二代広重、芳年、貞秀、芳盛、二代国輝等の合作。豎大晩錦絵の揃物で長州討伐の将軍家茂らの一行を描いたもの。

十六 『幕末明治開化期の錦繪版画』本文 p 十二～十四



图2 東京築地保呂留館繁栄之図 明治2

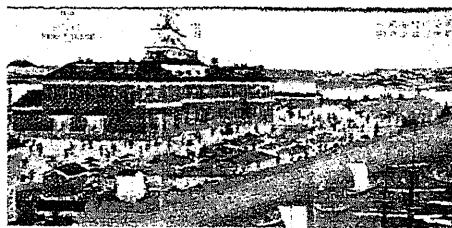


图1 東京築地保呂留館海岸前之図 慶応4

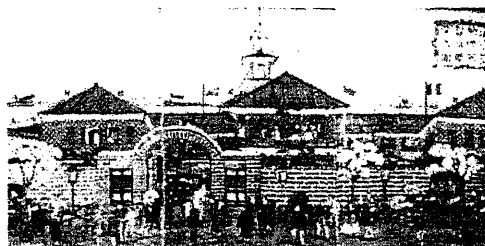


图3 築地ホテル館 明治元年

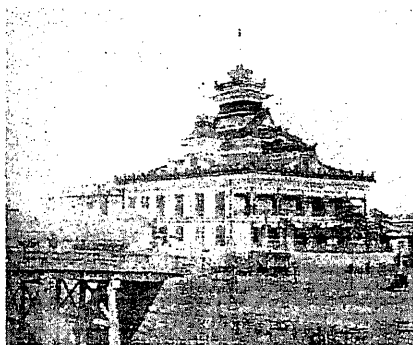


图5 三井組ハウス 明治5

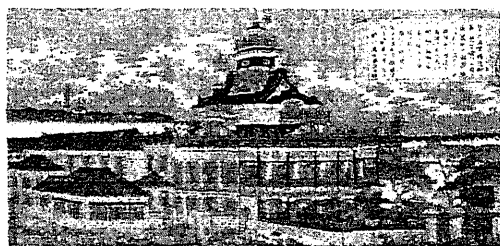


图4 東京名所海運橋五階造真図 明治6

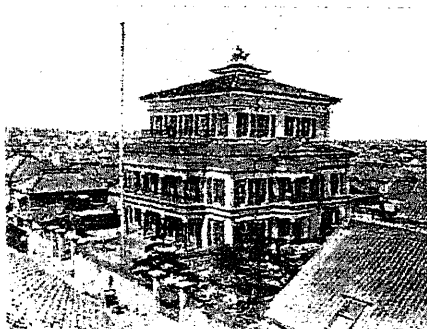


图7 東京駿河町三井組三階家西洋形之図 明治6

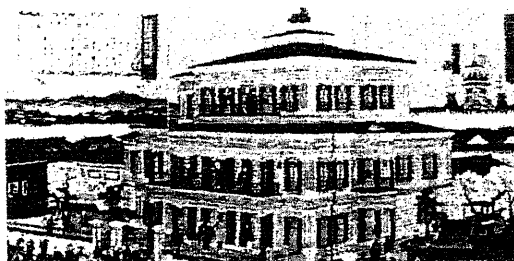


图6 東京駿河町三井組三階家西洋形之図 明治6



图9 第一国立銀行

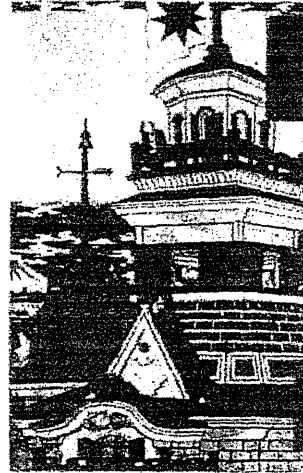


图8 築地ホテル館



图10 肥前長崎丸山廊中之風景 肥前崎陽玉浦風景之圖 文久2

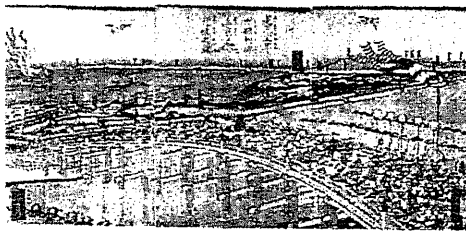


图12 建久元年源賴朝卿上京行粧之圖 文久2

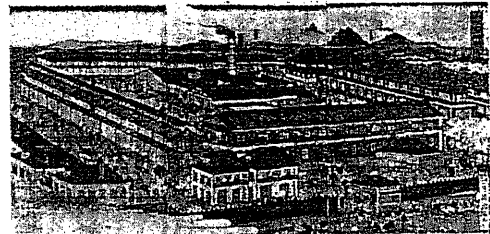


图11 上州富岡製糸場 明治6

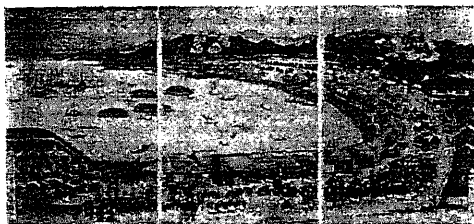


图14 東京呉服橋南通遠景之圖

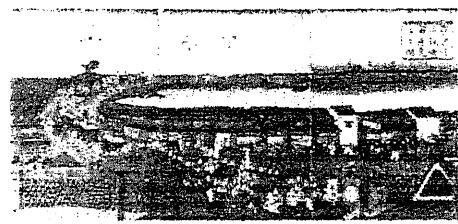


图13 東京江戸品川高輪風景 明治元



图16 神奈川横浜新開港圖

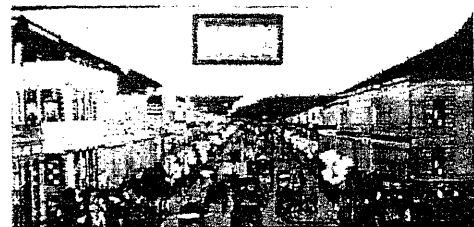


图15 第一大區從京橋新橋迄